

さて、はじめの子トヨキイリヒコは、上毛野、下毛野の君らの祖じゃ。その妹のトヨスキイリヒメは、伊勢の大神の宮を齋き祭りたもうた方じゃ。つぎに、オホイリキは、能登の臣の祖じゃ。つぎに、ヤマトヒコじゃが、この御子の葬りの折に、はじめて御陵に人垣を立てたというので知られておるのじゃ。人垣というのは、従う者たちを生きたまま埋め立てることでの、昔は、みなそうしておったのじゃ。

さて、この十継ぎ目のミマキイリヒコの大君の御世に、ひどくおそろしい出来事が起こったの、疫病みがこの国に流れ広がり、今にも人びとが死に尽きてしまいうようになったのじゃった。

それでの、なすべき手立ても使い果たした大君は、どうすればよいものやらと憂え嘆いての、神の教えを聞こうとして、くる日もくる日も真つ暗な殿の内に設えられた神床にじっと座り続けておったのじゃが、そのいく日目の夜更けになっての、大君がちとまどろんだすきに、オホモノヌシの大神が夢の中に顕れてきての、  
「これはわが御心であるぞ。この疫病みを鎮めるに、オホタタネコをもってわが前を祀らしめたならば、神の気は起こらず、国は安らかに平らかなるであろう」と、こう告げたのじゃった。

そこで大君は、早馬の使いを四方に分け遣わしての、オホタタネコという人を捜し求めたのじゃが、幸いにも、河内の美努の村でその人を見つけたのできての、大君のもとに奉ってきたのじゃ。

それで大君が、  
「そなたは誰の子であるか」と問うと、

「わたくしは、オホモノヌシの大神が、スエツミミの娘のイクタマヨリビメを妻として生んだ子、名はクシミカタ、その子イヒカタスミ、その子タケミカツチ、その子、それがわたくしオホタタネコです」と答えたのじゃった。

それを聞いた大君は、オホモノヌシが夢の中で教えたもうた者にちがいないと思つて、ひどく喜んでの、

「これで天の下は平らかになり、人びとは栄えるであろう」と仰せになり、すぐさま、オホタタネコを取りたてて神主としての、御詣の山に向向いて、オホミワの大神の前に額ずき、齋き祭ったのじゃった。

また併せて、イカガシコヨに仰せて、神に捧げ祀る供え物を盛るための八十もの平皿を作らしての、天つ神や国つ神の社を定め、すべての神をお祭りになったのじゃ。また、倭の東の方、宇陀の墨坂に坐す神には赤い色の楯と矛とを祭りたもうた。

また、西の方、大坂に坐す神には黒い色の楯と矛とを祭りたもうた。そしてまた、四方にある坂の尾根筋の神がみと河の瀬の神がみとも、ことごとくに忘れ残すことなく神への捧げ物をたてまつって祈られたのじゃ。

それで、ようやくのことに疫病みの気は鎮まり、国の中は安らかに平らになったのじゃった。

さて、この時に、夢のお告げによって見出されたオホタタネコじゃが、この人が神の子とわかったわけというのは、こういうことじゃった。

先に名をあげたイクタマヨリビメは、その姿かたちがきららしいお方じゃった。ここにまた、ひとりの男がおった。その男の姿かたちや振る舞いは、ほかに比べることもできんほどじゃった。その男がの、夜中になるとどこからともなくおとめのもとに来るのじゃ。それで、おたがいに引かれてしもうて、夜の間だけ床をともし住んでおるうちに、まだそれほどの時も経てはいなかったのじゃが、そのおとめは身ももつてもうた。

それで、おとめの父と母とは、娘が孕んだのを怪しんでの、

「お前は、わたしたちの知らないうちに孕んでしもうた。夫もないのにどうして孕んだのだ」と、わが娘に問うたのじゃ。すると娘は、

「うるわしい殿方がいらして、その姓や名も聞いてはいないのですが、その方が、いつも夜になるといらっしやり、心引かれてともに住んでおりましたところ、知らないうちに身ももつてしまったのです」と答えたのじゃった。

それで、おとめの父と母とは、その男を知ろうと思つての、わが娘に教えて、「赤土を床の前に撒き散らし、糸巻に巻いた紡いだ麻系の端に針を付けておき、殿方の衣の裾にこっそり刺しておきなさい」と言うのじゃった。

それで、おとめは教えられたとおりにして、明け方になって見てみると、針を付けた麻系はおとめの寝屋の板の戸の鉤の穴から通り抜けて外に出ておつての、枕元の糸巻に残った糸は三巻きばかりじゃった。

それで、糸が鉤の穴から外に抜け出ているさまから、父と母とは、すぐにただの男ではないということを見破つての、抜け出た糸をたどって尋ねて行くと、三輪山に到り、その神の社に行き着いたのじゃった。そこで、イクタマヨリビメの腹の子は、神の子であるということを知ったのじゃった。それで、糸巻に糸が三巻きだけ残っておつたので、その地を名付けて三輪と言ふことに